友人や親戚に囲まれ、
たくさんの花々や豪華な衣装に彩られ、
温かな笑顔に包まれた会場。

2005 年 10 月。二人は結婚披露宴を行った。

これから新しい生活が待っている。
ささやかながらも子供をもうけ
笑顔の絶えない温かい家庭を築いていこう。

そんな幸せから一か月ほど経ったある日、
夫である向井邦雄は、突然、勤め先の専務に呼ばれた。

そこには、会社の全社員が集合していた。

「みんな、申し訳ない。
会社を・・・たたむことになった。」

一瞬、なにが起こったのか理解できずにいた。
会社が倒産するということは、職を失うということか。

結婚して式を挙げたばかり。
その専務のひとことが、痛烈に心に突き刺さった。

目の前の、幸せに彩られた家庭の光景が、
ガラガラと音を立てて崩れ去っていくのを感じた。

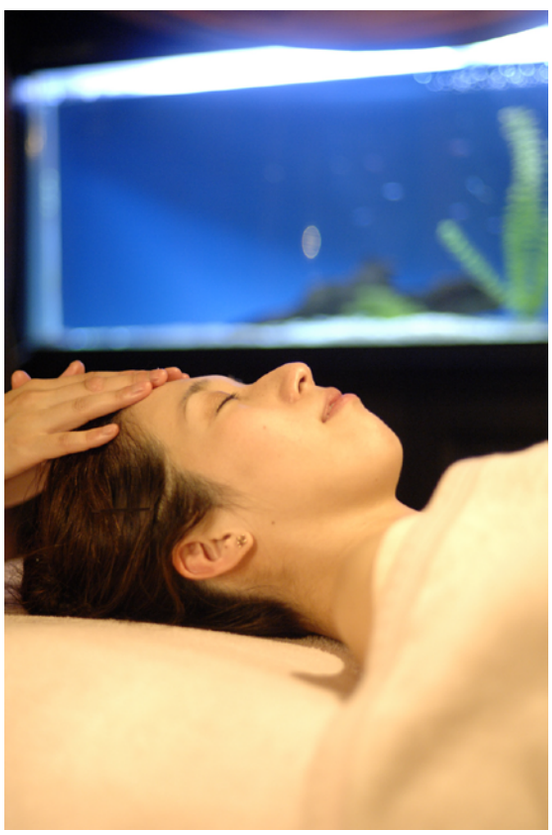
今になって思えば、ここがすべての始まりであった。
これからこの夫婦には、数々の試練と悲しみが降り注ぐことになる。

しかし、その逆境を乗り越え、ひとつの道を切り拓いてきた
そんな涙と喜びの軌跡を、これから書き綴っていこう。

この物語は、借金 1 千万のどん底の状態から
押しも押されぬ人気店へと成長していった
ひとつの小さなサロンの物語である。

【 ロズまり誕生物語 】

Rosemary Story



向井邦雄 著

結婚式を挙げた翌月に、勤め先を失う告知を受けた向井邦雄。

この先どうなってしまうのかという不安ももちろんであったが、
それ以前にもっと大きな悩みがよぎっていた。

「家族にどうやって話そう・・・」

実は彼、向井邦雄は、妻である向井麻理子の実家に
彼女の親と同居していた。

いわゆる「マスオさん」である。

「お嬢さんを幸せにします！」と大見得を切り、
いぶかしげな義父を強引に説得してまで結婚にこぎつけたというのに、
なんと言って説明すればいいのか・・・。
妻にはなんと言って話そう・・・。

見栄と体裁と焦りと不安が幾度となく交差していた。

当時、妻の麻理子は、大手化粧品会社に勤務していた。
成績も優秀で、次期店長候補といったところだ。
だからこそよけいに気が重い。

でも、話さない訳にはいかない。
恐る恐るその口を開いた。

泣き出しそうな妻。言い知れぬ不安がまた押し寄せた。

「とりあえず、父と母に話しておかないと・・・」

さらに胃が痛む。当時彼は３０代なかば。
特別な技術や資格があるわけでもなく、
良い就職先がみつかるかどうかも危ういところだ。

こんな婿をどう思うのだろうか。
もしかしたら、結婚が破談になるかもしれない。

意を決して、義母に真実を打ち明けた。
もう、すべてが終わるかもしれないと思った。

しかし、そのとき義母の口から出た言葉は
あまりにも意外なものだった。

「あら、よかったじゃない。
これでもっとよい仕事が見つけられるじゃない。」

何年も後になって聞いたところ、
その言葉は本心でなかったという。
本当は不安で不安で仕方なかったという。

でもその時、その言葉に彼はどれだけ救われたことだろう。
あのひと言がなかったら、本当に破談になってしまっていたかもしれない。
義母には、今も感謝してもしつくせない。

幸いなことに、退職金と、半年間の失業保険は受けることができた。
その間に、もっとよい職をみつけよう。
そのように前向きに考え、日々職探しに明け暮れた。

当時の彼には、まさか自分で店を出そうとか
会社を経営しようなどという発想自体がなかった。

ハローワーク通い。インターネットでの求人の検索。
家族を養うため給料のよいところ、
過酷でもよいから給料のよいところを中心に探した。

やっとの思いで見つかったのは、日本料理店の店長候補。
飲食店での経験が長く、店長経験のある彼にとっては
向いている職場だった。

毎日終電になりながらも懸命に働いた。

しかし、忘れてはならい。彼は新婚なのだ。

昼夜逆転の、すれ違い生活はかなりの不安を募らせた。
「このまま一生、こんな生活でいいのか？」

それに追い打ちをかけるように、店では
接客も知らない大学生のアルバイトが彼にこう言う。
「なにタラタラやってるの？もっと動いてよ。」

それまで２０店舗近い店で、教育係としてやってきた彼、
そんな彼が、新しい店では
毎日のようにアルバイトから見下され、辛辣な言葉を浴びせられていた。
新人なのだから当然だ。そんなことはわかっていた。

でも彼の中には別の思いがあった。

「すれ違いながらここで長くつづけるのか」

「それとも、また別の店に移り、一から同じことを繰り返すのか」

「この年になって、何ひとつやり遂げないまま、人生を終えるのか」

遅すぎるかもしれなかった彼の決断のときだった。

翌日、彼は退職願を提出した。

なにも決まっているわけではなかった。
ただ、
彼の中には何かが生まれようとしていた。

「自分の店を持ちたい」という
遠い昔に思い描いたおぼろげな夢。

それが今まさに、動き出そうとしていた。

だが、このときの彼はまだ知らない。

この先、誰も想像できないような怒涛の人生に
彼も妻も、大きく巻き込まれていくということを。